

(出典)「革新主義期アメリカにおける安全運動と移民労働者 セイフティ・マンによる『安全の福音』伝道」アメリカ学会編『アメリカ研究』第31号(1997年3月):19-40.

革新主義期アメリカにおける 安全運動と移民労働者

セイフティ・マンによる“安全の福音”伝道

上野 継 義

1 安全の福音

革新主義期のアメリカにおいて「安全運動」 safety movement と呼ばれる産業安全改革が大きな盛り上がりを見せた。この運動はU. S. スティール子会社のひとつイリノイ製鋼会社で開始された組織的な労働災害の防止活動に起源を有し、やがて鉄鋼産業をあげての一大運動へと発展したが、折からの革新主義思潮の興隆を背景に1910年以降各州で相次いで制定された労働災害補償法 (Workmen's Compensation Laws) に半ば強制されるかたちで全国的に波及し、1913年にはこの運動の標語「安全第一」 Safety First は国民的なスローガンであると言われるまでになる。ところで、安全運動の実際を大まかに見渡してみただけでも、これが単に生産現場における事故防止活動にとどまるものではなく、工場の枠をはるかに超えて、ひとつの社会運動として展開していたことがわかる。こころみにアリゾナ州鉱山局のレポートを繙いてみよう。「安全第一運動は国民的規模の運動である。工場内ばかりか、路上、学校のなか、さらには家庭内へも入り込んでいる。」¹⁾

いったいいかなる事情で安全運動はそのような様相を呈することになったのであろうか。ひとつには、革新主義期のさまざまな改革勢力と共働したためである。安全運動が重視した安全プログラムは、主として機械や生産工程の危険箇所を覆う「物的安全対策」と移民労働者に対する安全教育とからなり、とりわけ1908年に安全委員会活動が開始されてからは、後者により重点が置かれるようになっていたために、その当時、同じく移民労働者にかかわろうと切望していた社会改革の諸潮流と相互に密接な協力関係を築くことになったのである。いまひとつの要因は、この運動の担い手の行動力それ自体のなかにあった。彼らは巨大産業企業の安全管理者たちで、公式には「安全検査主任」 Chief Safety Inspectors,あるいはより一般的に「セイフティ・メン」 safety men と呼ばれており、1913年に「全国安全協議会」 National Safety Council (NSC) という強力な専門家団体を設立し、組織的な防災活動の普及に精力的に取り組んだのである。ノートン社の安全

技術者R. G. ウィリアムズ (R. G. Williams) は、この運動が一群の指導的なセイフティ・マンの思想と行動に深く依存している点に強い印象を受け、そのことを1915年6月10日、企業立学校全国協会ウースター大会で語っている。「全国安全協議会が成功しているのは、この活動の背後にいる人たちの問題関心と行動力のゆえです。キャンベルや [ロバート・J.] ヤング、ラルフ・リチャーズ、モーリー、パーマーやウィスコンシン州の C. W. プライス、この人たちの名前は安全の世界でとても大きな意味を持っています。この偉大なる安全運動の業績は、ひとえにこの人たちが手足となって成し遂げたことなのです。」²⁾

かくして当初はシカゴ地域のほんの少数のセイフティ・マンによって共有されていた諸経験が、彼らの旺盛な行動力とNSCの組織力を通じて広範な普及をみることとなるが、はなはだ興味深いことは、イリノイ製鋼南シカゴ製鉄所の労務安全監督アーサー・H. ヤング (Arthur H. Young) が、この運動の普及過程をキリスト教の福音宣教の歴史になぞらえていることである。すなわち、安全運動の歴史は「南シカゴの製鋼工場群における安全運動の誕生、それにつづく賢者たちの旅と新しい教えの受容、大衆の意識の覚醒、無欲な弟子による安全の福音 (Gospel of Safety) の伝播」であったという。³⁾

本稿では、セイフティ・マンによる「安全の福音」伝道の内容を、主としてその発振源となったシカゴ地域の産業企業、とくにイリノイ製鋼会社の事例を中心に具体的に検討しようと思う。その際に、訪問看護婦協会やキリスト教会、小学校の協力を得つつなされた移民労働者家庭に対する安全教育の取り組みに焦点を絞り、革新主義期の時代背景を視野におさめながら、安全運動の有する社会統制の側面を照射するとともに、福音宣教のアナロジーで語られたことの内実とセイフティ・マンの安全思想の特徴とを明らかにしてみたい。まずは彼らの安全対策の対象が工場現場を超えて拡大していく事情をあとづけることから始めよう。

- 1) Melville W. Mix, "Report on Manufacturers' Associations as Identified with 'Safety First,'" in National Council for Industrial Safety, Proceedings of the Second Safety Congress, New York, September 23rd to 25th, 1913, 114 (以下, NSC, Proceedings); S. C. Dickinson, How to Organize for Safety, Arizona, Bureau of Mines, University of Arizona Bulletin, no. 81 (10 March 1918): 2, 27 (quotation). 「安全第一」の標語については, Dianne Bennett and William Graebner, "Safety First: Slogan and Symbol of the Industrial Safety Movement," Journal of the Illinois State Historical Society 68 (June 1975): 243-56.
- 2) 上野継義「イリノイ製鋼社における安全委員会活動と雇用管理の近代化 1907～1916年」『経営史学』29 (April 1994): 1-30; 同「アメリカ産業における安全運動の波及と労使関係管理の生成 1908～1915年」『経営史学』31 (January 1997): 1-31; National Association of Corporation Schools, Papers, Reports, Bibliographies and Discussions, Third Annual Convention, Worcester, Massachusetts, June 8-11, 1915, 803 (以下, NACS, Papers). 以下「セイフティ・マン」という言葉の使用にあたっては, 原資料からの引用の場合を除いて, 単数形で統一する。
- 3) Arthur H. Young, "Practical Aspects of the Safety Movement," Industrial Management 54 (October 1917): 30.